

資料室だより 128

本科29期卒業生の寄付金によって以下の楽譜を購入しました。時宜にかなった選書と
思っております。歴史の中で繰り返されたパンデミックに人々がどのような音楽をよりど
ころとして乗り越えていったのかが検証されています。

「疫病の時の歌」と訳せばいいのでしょうか。

Recent Reseaeches in the music of the Renaissance, 172

Ed by Remi Chiu A-R Edition

[Songs in Times of Plague]

1347年、イタリアの港から侵入した疫病ペストはヨーロッパを恐るべき速さでパンデミ
ックに陥れ、それは19世紀になるまで波状的に西洋社会を襲いました。ペスト流行と音楽
との関連で編纂されたこの類稀な叢書はアメリカのウィスコンシンに本社がある A-R
Edition がルネサンス音楽研究シリーズの一環として今年出版したものです。序文（英文）
には日本の細菌学者でペスト菌を発見した北里柴三郎の名も見えます。

ここに収録された音楽は15世紀から17世紀までの作品であり、これらを単に美しい音
楽として甘受することも可能です。しかし、序文にもあるようにここにあるのは病に対する
逼迫した感情であり、疫病と戦うために何かをしようとしたことを意味します。

聖セバスチャン、また、14世紀にペスト流行の折に人々を癒す奇跡を起こしたという聖
ロクへの嘆願のモテットなどはペスト流行の時代を背景にしてこそできたものであり、テ
キストもペスト流行時に書かれたものです。苦難のときによりたのむ聖人の筆頭は聖母マ
リアです。ここに収められているガフリウス(16世紀)のモテット Virgo Dei digna のテキ
ストを見ますと、まず聖母を呼び、次には天使ミカエルです。すなわち死者ミサにおいて天国
に伴う役割のミカエルが聖母の次に名を呼ばれているということは、死期が近いことを表
しているのではないのでしょうか。そして次に「天国の鍵を持つペテロよ」という呼びかけが
来る。臨終の苦しみをやわらげる聖母、そして魂を抱きとって天国に連れていくミカエル、
そして天国の門の鍵をあけるペテロを続けて呼んでいるテキストを見るとこの歌の切実さ
を感じざるをえません。ここに収められた曲は実際にペスト終息を願ったミサのなかで歌
われた可能性もあります。旧約聖書をみましても人々は絶えず「剣（戦争）、飢え（飢饉）、
疫病」にさらされて死と隣り合わせのなかで神に語り掛けながら生き抜いてきたことがわ
かります。

2020年、パンデミックに襲われた私達にとって、この曲集は時代を超えて共感できる切
実なものがあります。疫病による苦しみと不安のなかからも音楽による美が産み出されて
きました。どんな苦難のなかからも人は表現活動を通して美を求め、創造するのです。

(杉本ゆり 記)